白糠のアイヌ語地名

第１回

白糠町には古くからアイヌの人たちが住み、豊かな自然やその恵みとともに独自の文化を育んできました。その中で最も身近なものが、普段私たちが使っている地名です。本町の名前である「白糠」をはじめ、町内にある地名の多くはアイヌ語に由来しています。

そこで、本町のアイヌ語地名について、白糠地名研究会が刊行した『白糠のアイヌ語地名』をもとに、地名の由来とその場所にまつわる話を「海岸筋」「茶路川筋」「庶路川筋」「和天別川筋」の４つに分け、今月から順に紹介します。

白糠地名研究会がまとめた『白糠のアイヌ語地名（１９８５年発刊）』で、故坂本正能会長は、次のように述べています。

「アイヌ民族は文字をもたなかったが、その鋭敏な感覚と優れた記憶力により、地形・山・河川・湖沼・産物・生活環境、自然の風物等を的確に地名にあらわした。アイヌ語地名を聞くだけで、居ながらにしてそこの地形なり産物なりを眼にうかべることができる」

このように、アイヌ語地名は、ふるさと白糠の今と昔をつなぎ、土地の成り立ちやその場所のようす、人々との関わりを明らかにしています。

■海岸筋のアイヌ語地名（１）

○白糠（しらぬか）

「白糠」は、「シラリ（磯）・カ（上・越える）」に由来し、波が磯を越えてしぶきがたつ「岩磯のほとり」を意味します。

オクネップ川から白糠漁港をはさみ、シラリカップ川までの岩磯のようすからこの名がついたと言われています。

▲白糠港の東側に見える岩礁。昔は岩礁の上で休むトッカリの姿を見ることができました。

○オクネップ（川）

「オクネップ」は、東茶路から白糠市街地の東側をとおり、厳島神社の下で白糠漁港へ流れ込む川の名前です。

よく流木がひっかかってつまったことから、「オク（ひっかかっている）・ネッ（流木）・プ（ところ）」と名づけられました。

▲白糠港の西側から太平洋に流れ出ているオクネップ川。

○シラリカップ（川）

石炭岬の奥の山中から岬３丁目をぬけて「白糠」の由来となっている磯に注ぐ川の名前です。

その川口が「シラリ（磯）・カ（上・越える）・プ（ところ）」です。

▲白糠斎場の近くから撮影したシラリカップ川。

◆地名にまつわる伝説２題

①トドのかたちをした大岩の伝説

オクネップ川の川口に、トドのかたちをした大岩があった。潮が満ちてくると、潮は波しぶきをあげながらその岩をまたいだ。

シララは岩磯、オイカはまたぐ。潮がシララをオイカしたのである。

シララオイカがシラライカに転じ、それが岩磯にあふれるという意味のシラリカとなった。それがいつしか和人の耳にシラヌカときこえ、白糠という漢字があてられた。

（貫塩喜蔵エカシの話）

この話に出てくるトドのかたちをした大岩には深い意味があります。

トドは、アイヌ民族にとって貴重な食糧であり、その脂と皮は大切な生活必需品でした。アイヌの人たちは、トドがとれるように、岩の上にヌサ（御幣）を立ててカムイノミ（神々への祈り）をしたということです。

②カムイ・トッカリ岩（神のアザラシ）の伝説

石炭岬の東の谷間の奥から清流のシラリカップ川が真っ直ぐに海に出て、平磯の上を走って突き当たるところに、陸に向かってちょうどトッカリ（アザラシ）が頭を上げて、腹ばいになったように見える岩があった。

潮が引いて、日に照らされるときには、黒く光って見えた。この岩は昔から、サマイクル（人々に生活の知恵を授ける神）がアイヌに幸不幸を知らせるために遣わされた使いのカムイ（神）がなったと言われている。

引き潮にこの岩がはっきり見える間は、魚や昆布がたくさんとれて食べ物に不自由はなかったが、砂に埋まって見えなくなった場合には、不漁で苦しめられた。この時には、村の長はカムイノミをしたものだ。

（千葉ヌイフチの話）

〔市立釧路図書館報『読書人』掲載「釧路地方の伝説」（佐藤直太郎）から引用〕

■海岸筋のアイヌ語地名とそこにまつわる話題

①白糠
関連地名／オクネップ（川）、シラリカップ（川）／地名にまつわる伝説
②パシクル（沼）／パシクル伝説
③オショロコッ／義経伝説
④和天別（川）／和天別川河口遺跡のこと
⑤茶路（川）／茶路川の奇談
⑥シリエド
関連地名／石炭岬
⑦サシウシ／サシウシチャシコツと伝説
⑧チカヨップ（オンネチカオプ川）／網走へ通じる道
⑨庶路（川）／庶路川にまつわる伝説
⑩恋問／コイトイ沼の伝説

右記『海岸筋のアイヌ語地名』10カ所を、今月から順に紹介します。また、場所については、下記図面を参照してください。